

## 独思録：「入院」(2/5)

今泉 蓮

中学生の時以来、50年ぶりに入院した。新年早々になるとは思ってもいなかった。石川啄木、正岡子規、芥川龍之介、宮沢賢治、寺田寅彦など名立たる作家たちは自分の病気をエッセイにまとめている。特に闘病生活の長かった正岡子規には多い。

寺田寅彦の「病室の花」は、病室で夏目漱石が病気重態という報知を受けて見舞いに行った時の事を思い出している。その時に見舞いに持って行っていったのがペコニアの花鉢であり、自分も何人かの見舞客からペコニアを贈られ、病室に置いてその比較を楽しんでいる。その時ペコニアの花鉢は大事に紙で包んでぶら下げて車にも乗らず早稲田まで持って行ったようだ。

夏目漱石の様態は、重態であり面会は許されず、持って行った花は夫人が病床へ運んでくれ、夫人をとおして「きれいだと言っていましたよ」と言った漱石の言葉をもらったことを書き、さらに、「考えてみるとこれが先生から間接にでも受けた最後の言葉であった。今自分は先生の生命を奪い去った病と同じ病で入院している。幸いに今度はたいして危険もなくて済みそうである。」と続けている。

吾はというと、入院する一ヶ月ほど前、かかりつけの病院に行った時に、専門医のいる病院への紹介状をもらい、診てもらったらしいと言われていたが、正月でもあり、また2月初旬に締め切りの仕事もあり、病状を軽くみていたきらいがあった。書斎の机の上に書類を並べて置いて、毎夜蛍光灯の光の下でパソコンをたたいていながら、頭の端に暇があったら診てもらいに行こうかと思っていたが、急に症状が悪化し入院するようになった。

吾の入院は夏目漱石や寺田寅彦とは違い見舞い客も来ない淋しい療養となった。しかし、幸いにも携帯メールは病室でも使え、何人かの人から見舞いのメールを受け取った。

病院の窓から見える風景は、丹沢の山々の向こうに聳える雪を被った富士のお山。その美しさは、唯一淋しい心を慰めてくれた。

十日余り入院している間に吾の周囲にも内部にもいろいろとやらなければならぬ仕事があった。いろいろの資料を読んでいろいろの事も考え、久し振りに手書きでいろいろな文章をノートの中に書き殴った。退院後パソコン入力する二度手間はあるが、結構仕事は進んだようだ。今こうして退院すると、ただ病室のベッドの上で頭の中をにぎわしてくれたのは仕事だけだったと思う。入院中の吾の生活のあらゆるものがこれで尽くされたような気がしてくる。人が読んだらなんでもないこの久々の文章も、吾にとって久々の手書きの文字であらゆる忘れがたい貴重な経験の思い出になるように思われる。



< 参照寺田寅彦「病室の花」